

ナタンの預言Ⅱ

(Ⅱサムエル12・1〜15a)

一、はじめに

私たち信仰者が「主なる神がこのようになさった」と語るの、たいへん畏れ多いことです。ところが、聖書記者は大胆に語っています。12章1節です。
「主がナタンをダビデのところに遣わされたので、彼はダビデのところに来て言った」と。どのような過程を経て、こういう言葉がサムエル記に書き込まれたのか、詳しくは分かりません。いずれの王ダビデが行った不祥事が記録されているということは、ダビデ王の許しがあったからに他なりません。

二、ナタンの言葉

ダビデは罪を犯すことにより、神の前に隠し事を持つようになりました。すなわち、それまで主の前に何の隔たりもありませんでしたが、今は以前とはちがいます。それまでと同じように、主を賛美することができなくなったこととでありましょう。側近も、王の異変に気づいたこととありましょう。ナタンは王の顧問官であったと思われるが、ダビデ王が行ったことを知り、心を痛めていたこととありましょう。行間を読むこととなりますが、主がナタンを

ダビデのところに遣わし、主の御意思を語るまでに、かなりの期間があったと思われる。ナタンは、ダビデ王を尊敬していました。ゆえに「わが尊敬する王がなぜ罪を犯してしまったのか。王はなぜ黙っておられるのか。主が悲しんでおられるのが分かる」と心を痛めていたこととされます。ナタンは主の霊に導かれて、一つの話を準備して、ダビデ王に語りました。それが、1節後半より4節に書かれています。〈ある町にふたりの人がいました。ひとりはお金でいる人、ひとりは貧しい人でした。富んでいる人には、非常に多くの羊と牛の群れがありますが、貧しい人は、自分で買って来て育てた一頭の小さな雌の子羊のほかに、何も持っていませんでした。子羊は彼とその子どもたちといっしょに暮らし、彼と同じ食物を食べ、同じ杯から飲み、彼のふところやすみ、まるで彼の娘のようでした。あるとき、富んでいる人のところにひとりの旅人が来ました。彼は自分のところに来た旅人のために自分の羊や牛の群れから取って調理するのを惜しみ、貧しい人の雌の子羊を取り上げて、自分のところに来た人のために調理しました。』という物語です。話を聞いたダビデ王は激怒して言いました。「主は生きておられる。そんなことをした男は死刑だ」(5節)と。ナタンは言いました。「あなたがその男です」(7節)と。ダビデ王は、自分の

行ったことが死刑に当たると宣言してしまったこととなります。ナタンの言葉はさらに続きます(7c〜12節)。するとダビデはナタンに言いました。13節です。〈私は主に對して罪を犯した。〉と。この時ダビデは、ほんとうに悔い改めたようです。ナタンが次のように語っているからです。〈ナタンはダビデに言った。「主もまた、あなたの罪を見過ぎてくださった。あなたは死なない。」(13節続き)と。

三、真の悔い改めとは

ダビデの悔い改めは本物でした。こういう箇所があります。それは、ダビデが息子アブシャロムから裏切られ、家来たちと一緒にエルサレムから出て行った時のことです。サウルの家の一族のひとりシムイがダビデをのりりしました。すると、家来がダビデに言いました。「行って、あの男の首をはねさせてください」と。ところが、ダビデは言いました。「これは私のことで、あなたがたには、かかわりのないことだ。彼がのろうのは、主が彼に、『ダビデをのろえ』と言われたからだ。ほうっておきなさい。彼にのろわせなさい。主が彼に命じられたのだから」と(Ⅱサム16章)。

四、詩篇51篇より

私たちが人に罪を犯すとき、実は主に對して罪を犯しています。ダビデが

行ったウリヤの妻との不倫、ウリヤの妻を奪ったこと、ウリヤの妻が身ごもった後にウリヤを殺したことで、それらは人に対する行為でしたが、ダビデは「私は主に對して罪を犯した」と語りました。ダビデが預言者ナタンの言葉を聞いて悔い改めたときの詩とされる詩篇51篇を見てまいりましょう。3節に、〈まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。〉とあります。「罪」とは神の御心に適わない状態にあることです。それが〈いつも私の目の前にあります〉と告白しています。これは、罪をごまかさぬ姿勢です。また、〈私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行いました。それゆえ、あなたが宣告されるとき、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。〉(4節)とも語っています。これは、主の裁きを受け入れる姿勢です。罪を犯したのだから、自分はどうなってもかまわない、正しい主に委ねる、という姿勢です。

イエス・キリストは、私たちが自分ではどうすることもできない罪、すなわち神の前に犯した罪のために死んでくださいました。信じる者は罪赦され、生涯にわたり償いをしたいと願うようになります。償うことによって、それと引き換えに罪の赦しをいただくではありません。御霊に導かれてのことです。